

■■■ 選択し職務を果たすこと ■■■

4月中旬、介護備品や消耗品の取り引きをしている業者から連絡があり、「（紙の）マスクを2500枚単位で発注すれば、確保できるそうです」と総務スタッフから伝えられました。

普段であれば、見本があって、品質と価格を見て、なおかつ在庫を考え必要な分量を発注することになります。今は、新型コロナウイルス禍によって街中からマスクが無くなり、需給のバランスがおかしくなったため、発注するか見送るかしか選択肢はなくなりました。

KFCでは、今回の新型コロナウイルス禍が起きてから備蓄マスクや寄贈マスクなどで幸運にも介護スタッフや会議用マスクなどを確保できてきました。

そのこともあり当初は、通常（日々変化しているので基準も難しいですが）の価格よりも高いと思った大量のマスク購入に対して、価格だけでなく色々な意味も含めて否定的でしたが、現場管理者からのデイサービスに來ている高齢利用者からマスクを手に入れたいのに買えないという声がありますという話を聞き、組織の代表者として購入を決めました。

しかし今も自分の選択について、さまざまな思いを抱いています。マスクの大量売り（何千枚）については、概ね1枚50円～70円ぐらいでの案内が、どういうルートで連絡先を手に入れるのかKFC宛に日々届いています。こんな売り方が、蔓延していく中でより一層、街中で多くの方はマスクを買いたくても買えなくなるのだと考えます。その意味では、私の選択も「自分たちだけ確保できればいい」という社会を作ってしまったのかもしれない。

資本主義の世の中で、皆が欲しがっている物の値段が上がるのは仕方ないことだ、欲しければ供給する側の条件に合わせるしかないという考えもあるかもしれませんが、多くの方はそんな考えに同意している訳ではないと思います。

KFCに話をもってきた業者も、適正な利益を得て付き合いのある介護事業者に必要な消耗品の営業をかけてきた、もっと好意的に見れば相場よりも安い価格を提示してくれたとも考えられます。私の選択も「KFCだけよければいい」ということではなくKFCが支える人たちに渡せるようにと考えた「判断だった」と自分を納得させられることかもしれません。

社会が不安定になる時、何かを選択することは平時よりも何が「正しい」のか「間違っている」のかの境界が難しくなります。

家計の苦しくなった世帯に30万円の給付が、誰でも一人10万円の給付に変更されました。学校を感染防止のためにどれぐらい閉鎖すべきか否か、コロナ対策としての店舗の閉鎖とその結果生まれる仕事の喪失など、何かを選択した時には失う「良さ」があるのだと考えます。

しかし、日々不安に駆られる中で流される情報の中には、選択しなかった「良さ」について全くふれないことが「正義」だとも言わんばかりの歯切れの良さが受けたりしています。また高みの見物を決めこみ選択することから離れ、評論するだけに留まる者もいます。

阪神・淡路大震災、リーマンショック、東日本大震災そして今回の新型コロナウイルス、多くの災厄を経験し見てきた中でいつも感じたその前の社会の歪み（差別や搾取が生み出す格差など）が生み出す苦難は、厳しいものです。

犠牲が弱者に多く発生することは、人災と言えることです。人災を少しでも減らすために緊急時だけでない平時も含めた「選ぶ」ことの重みを今一度、受けとめたいと考えます。

在日コリアンへの差別と社会保障からの排除、インドシナ難民のお粗末な受入、雇用調整弁にされていた日系南米人労働者、制御できないのに嘘で進められた原子力発電所推進、焼き畑農業のような「貧しい国」からの労働力の入れ替え輸入を制度化した技能実習生と外国人特定技能労働

者受け入れ、それらを選択し進めてきたのは、「民主主義」の中で選ばれた人と任命された人によってつくられた何かおかしな中心がある政治と行政です。

KFCは、今回の新型コロナウイルス禍によって施設の閉鎖、事業の休止、介護利用者の減少など多くの困難を抱えています。この国のリーダーたちが連呼する「国民」よりも広い日本に暮らす人たちの力になればと考えます。

アルベルト・カミュは、小説「ペスト」の中でペストが蔓延しはじめた街に立ち向かう医師リユーの思いとして、「毎日の仕事のなかにこそ、確実なものがある。その余のものは、とるに足らぬつながりと衝動に左右されているのであり、そんなものに足をとどめてはならない。肝要なことは自分の職務をよく果たすことだ」と書きました。

重みを踏まえた選択をし、自分の職務を果たせればと思います。 (金 宣 吉)

◆カナダ出張のご報告

KFCでは第三国定住でマレーシアから日本・神戸に移住したミャンマー出身の難民家族が自立して生活していくために、生活支援と日本語・教科学習支援を行っています。その支援を充実するための情報収集の一環として、笹川平和財団のご協力により機会を得て、2020年2月11日～13日にカナダの首都オタワで行われた難民の第三国定住に関する国際会議ATCR-WGR(Annual Tripartite Consultations on Resettlement-Working Group)に出席させて頂きました。

ATCRはUNHCR(国連難民高等弁務官事務所)、NGO、政府の3者間で毎年行われている国際会議で、難民の第三国定住に関する施策の構築や提言、運用をめぐる議論や情報共有を行い、国際社会が協力して難民の第三国定住にアプローチするという目的で1995年から開催されています。第三国定住を行っている国が毎年持ち回りで議長国を務めており、2020年はカナダが議長国です。

○ATCRの内容

今回のATCRでは補完的保護(難民が第三国定住先で安全に自立した生活を送るための道筋。合法的な滞在ビザ、資金援助、家族結合の推進、教育や雇用機会の確保などが要素として挙げられます)の拡大・充実や関係者の協働、成功事例の共有といった題目で3日間にわたってパネルディスカッションや分科会が行われました。主催国カナダや第三国定住を積極的に推進している欧米諸国を中心に16か国104名が参加し、アジアからは日本のみが参加していました。毎年何百何千人と難民を受け入れていて知見が豊富な国の発表や発表している人のコメント、話し方、雰囲気などを総合的に観察して、また意見交換を通して、世界の潮流を勉強させて頂きました。

今回のATCRで特徴的だった内容の一つは「難民の有意義な参画」が提唱されていたことで、参加者の3分の1が難民の経歴をもち、現在は政府機関やNGO等で活動されている方々でした。そういった方々が各自の経験に基づいた発表を行っていました。どの国の発表者も堂々と自分の出自や意見を述べており、積極的に意思表示していくんだという姿勢を強く打ち出していました。(とはいえ、当事者の出席はATCRでも昨年やっと始まったとのことで、施策決定の場における「当事者性」は世界的にまだまだ遅れているそうです。)

3日間の会議の中でほかに印象的だったことが2つあり、一つは難民支援にあたって地域社会との関係構築が重要だと多くの参加者が認識していたことです。地方自治体や地域の団体、個人と良好な関係を築いて、「味方」(支援者、理解者)を増やすことで地域への定着、自立が促進されるという見方です。地域の有力者(自治会、企業、教会、時にはメディアなど)の協力・理解を得ていくことの大切さを訴える主張も聞かれました。神戸の難民家族も多くの方々の有形無形のご協力によって支えられているため、この点は共感することができました。

もう一つは、NGOとしての支援のスタンスについてです。ATCRには多くのNGO関係者の出席がありました。ある出席者が平等な支援機会について言及していました。支援者は凶らずも言葉の習得が速い人や弁が立つ人などに、そうでない人よりも多くの情報提供や便宜を図りやすいという指摘です。これには私も普段気が付くことがあります。本当は困っていても人に相談できていない、顕在化していない、周りが気付いていないケースがあると念頭に置き、一人ひとりをしっかり捉える視線が支援者として必要だと感じました。

○現場視察

ATCRの最終日には支援現場を視察するプログラムがあり、CCI Ottawa(Catholic Centre for Immigrants)という団体を訪ねました。CCIは、人口の20%が移民によって構成されているオタワ市において60年以上活動する、経験と実績を持つ非営利民間団体で、第三国定住難民を含め年間約6,000人の難民支援を行っています。地域の様々な支援団体や行政と協力しながら、難民が地域に定着して自身のポテンシャルを育み、活かし、社会を発展させられるように支援を行っています。支援の内容はカナダ入国前のオンラインでの情報提供から入国後の住居提供、言語習得支援、職業斡旋、医療提供からメンタルヘルスケアまで実に多岐にわたっており、各部門で支援組織が細分化されています。部門が細分化されて専門職員が配置されているという体制そのものが、難民支援の充実度合いを物語っていました。今回の視察では活動拠点の交流スペースで各部門の責任者から部門紹介を受けました。

CCIの難民支援の中で特に印象的だったのは、難民が自立するために必要な基礎支援だけでなく、社会を発展させるための人材として積極的に捉えたエンパワーメント事業が充実していることです。例えば、長期的にカナダ社会の担い手を育成するために、14~24歳の若者の学校生活や就職活動を支援する“Youth Program”が挙げられます。また、難民となる前に出身国において医療や介護業界の勤務経験、知識を持っている人に対しては高度人材として相応な就職先を得られるようにするための研修や仕組みづくり、就職斡旋を行う“Career Transitions”、或いは起業志向の方向けに研修や資金支援を行う“Entrepreneurial Newcomer Refugees and Immigrant Collaboration Hub”などもあり、移住先で出身国での経験を活かせないことが多々ある移民の就職事情において、社会で活躍できる道筋を提供しているのは大変意義あることだと感じました。また、今回の視察の現場となった場所は普段は難民の活動スペースとなっており、交流活動や支援活動が活発に行われる場所です。ATCRの会議でも地域の共有活動スペースの存在は地域とのつながり、地域での活躍を促す上で重要だと述べられており、CCIはそれを体現していました。またCCIの活動スペースはふたば国際プラザのレイアウトとよく似ていました。ふたば国際プラザも難民の自立支援、エンパワーメントの拠点として更に発展させたいという気持ちになりました。

○振り返って

3日間の会議と現場視察を通して、各国が力を入れている支援や課題として抱えていることを学び、今後の支援に活かしたいことが多くありました。特に大切だと感じたのはやはり教育、スキルアップの支援でした。第三国定住で来日して一番期待されていることの一つは、子どもに良質な教育の機会を提供することです。日本であれば、進学や就職の進路、選択枝を示すことができます(困難はあると思いますが)。段階に応じた情報提供や、選んだ進路を実現する道筋についての支援が必要です。また、親、大人でも幼少期に教育機会が得られなかった人が多いです。日本語学習はもちろん、希望に応じ、夜間学校や、専門学校などスキルアップの道を開くことも必要です。

注意すべきこともあります。一つは何か選択するときや支援を行う際の当事者意思の尊重です。それから、第三国定住で来日している難民家族の人数は現状では非常に少なく、生活に必要な民

族コミュニティや出身国コミュニティが希薄であることから、他地域のコミュニティと交流する機会を実現するなど、ネットワーキングの支援も必要かと思えます。神戸に移住した家族が地域の一員として自立し活躍してゆけるように日々取り組んで参りますので、今後とも引き続きご協力を賜ります様宜しくお願い致します。（大石 貴之）

■■■ ハナの会 ■■■

◆コロナ対策

新型コロナウイルスが世界中で感染拡大しています。予防策として感染委員会を2週間に1回行い、マスク全員装着、来所時の検温、手指アルコール消毒及び、手洗いや座席の間隔をとっています。また、休みのご利用者様の電話健康チェック、車の最終使用後消毒等を行っています。マスクや食毒液もスタッフ全員で買い求めたり、業者より高値で仕入れもしていましたが、月末に韓国民団兵庫県本部等から寄付していただいて、助かりました。ご寄付に感謝申し上げます。

ご利用者様のカラオケ・密な体操を中止しているかわりに、スタッフが手作りゲームを作成したり、少しでもストレス発散やリハビリを楽しく行えるよう考えています。スタッフも利用者様もコロナに負けない体力づくりを今後も続けていこうと思えます。（中野 一恵）

■■■グループホーム ハナ 小規模多機能型居宅介護 ハナ ■■■

◆コロナに負けず元気です。

今年の花見はどこに行く？と話し合いをしていましたが、新型コロナウイルスの関係で利用者様の外出は禁止となってしまいました。外はポカポカ陽気で外出するにはいい気候なのに残念ですが、こればかりは仕方がありません。外出する事が出来ない今、施設内で何が出来るのか、少しでも楽しんで頂けるのは何なのか、こんな時だからこそレクリエーションを充実させる事が必要だと痛感しています。

その日の出勤者で話し合っ「今日はいい天気で暖かいので屋上に行ってオヤツを食べよう」となり、スタッフが手分けして、テーブルや椅子を屋上に持ち込んでオヤツタイムを行いました。大きな声を出して日頃のストレスの解消なのか？真っ昼間に歌う歌としてはふさわしくないかもしれませんが、「かごのとり」をみんなで歌っての大合唱。皆さん歌詞カードを見ることなく覚えておられました。「ああ～外にも行けず、籠の鳥状態やなあ！」なんて声もチラホラあり大笑い。笑う事は免疫力が向上します。しかしながら、その時間に通った道行く人は??状態だったのではないのでしょうか。

お花見には行けないけれど、桜の花でも購入してお弁当を持って屋上で楽しもうと計画を立てて、桜の花を調達する人、椅子やテーブルを運ぶ人、屋上に誘導する人、お弁当を作る人と手分けして行いました。イベント事に関してのスタッフの団結力は凄いです。なんとって宴会部長であるスタッフのT・Nさんがいるからです。

その他にも、お誕生日会やカラオケ・たこ焼きパーティなどを行い、日々の日常生活にほんの少しですが変化をつけています。フロアに関係なく皆さん仲良く歌っておられます。そのうちのど自慢大会に出場できるかもしれません。

マスク不足の今、利用者さんと一緒に布製のマスクの作成を行いました。認知症になっても身体で覚えた記憶（手続き記憶）は保たれています。スタッフである私はマスクを作る以前の問題で針に糸が通せない。そんな私を見るに見かねたのか？利用者様があれよという間に通して下さる。まさしく共同生活ですが、どちらが利用者でどちらが介助者なのか分からない状態となりま

した（苦笑）。マスクは販売出来るレベルに仕上がっていますので、このマスクをプレゼント出来たらいいのに、そうすれば認知症になっても社会の役に立つ事ができるということが実践できると思います。

また、ご家族様との面会が出来ない今、タブレット端末を使ってLINEによるテレビ電話を行っています。利用者様は不思議そうな表情をされていますが今後も継続します。ご家族様に少しでも安心して頂けるように。

幸いにして利用者様もスタッフもコロナに感染した人はいません。皆さんコロナに負けず元気です。スタッフの公休日はSTAY HOMEに徹しています。今後も施設内からクラスターを発生させないと取り組んでいます。皆様も今暫く外出を自粛して下さいと嬉しいです。そして、コロナが終息したら遊びに来て下さい。心よりお待ちしております。（星野 敬子）

■■KFC日本語プロジェクト■■■

◆日本語ボランティア講座「日本語学習者の『わたしの物語』をもとにした活動の紹介」

2020年1月26日（日）に日本語ボランティア講座「日本語学習者の『わたしの物語』をもとにした活動の紹介」を開催し、21名の方に参加いただきました。

八木真奈美先生（駿河台大学教授／人によりそい、社会に対峙する日本語教育研究会）を講師として迎え、外国から日本に移住した方々が自分の経験を書いたストーリーを集めた冊子『わたしの物語』を用いた活動の紹介をしていただきました。

講座の前半では、八木先生が出会った日本語学習者の語りが紹介され、日本語を学ぶことの意味は、学習者一人ひとりによって異なることを確認しました。後半では実際に『わたしの物語』を使用したワークを体験しました。収録されているストーリーは日本語だけでなく、英語、中国語、韓国語、スペイン語に訳されており、これを日本語学習者と支援者が一緒に読むことで、共に話し、考え、社会とつながるためのきっかけとすることが目指されています。この活動を行う際はすべての人が対等な参加者の一人という認識を共有し、参加者から質問を受けない限り、実践者の側から、語彙や内容の確認は行わず、必要であれば翻訳を配布するとのことでした。

通常は日本語学習者と支援者がともに語り合う活動となりますが、講座では参加者のみのグループでストーリーを読みました。ワークを通して一緒にストーリーを読んだ日本語ボランティアの方の視点や、その人の言葉や生活に対する見方に気づくことができ、自分の日本語支援者としてのあり方を振り返るきっかけとなりました。

（林 貴哉）

■■■KFC外国にルーツを持つ子どもの学習支援■■■

◆進学状況

2020年3月に中学生11名が卒業しました。公立6名（うち定時制2名）、私立高校5名の進学が決まりました。

卒業式、入学式ともコロナの影響を受けて通常通りとはいかなかったようですが、早くみんな楽しい高校生活を迎えられるよう願っています！

緊急事態宣言後、KFCの学習支援も休止せざるを得ない状況になっています。今後、家庭の経済状況の悪化などに伴い、学習継続が難しい子どもも出てくるかもしれません。オンライン学習等も少しずつ取り入れていく予定ですが、こぼれてしまう子どもがいないようにすること、また学習以外でも少しでも子どもたちのためにできることを考え、取り組んでいこうと思います。

■■■ 今後の予定 ■■■

◆今後の予定

■2020年度総会

5月23日(土)18:00 KFC本部

■ふたば国際プラザ

6月1日(月)まで休館